



『姫路の中世城館跡』をたずねて その2



注1：旧郡名は江戸時代（旧高旧領取調帳による）の郡域・郡名。

注2：『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』（兵庫県教育委員会）は『城館』、『城郭研究室年報』は『年報』、「赤松家播備作城記」は「城記」と略。「増補播陽里翁説」「播磨古所跡略説」は『播陽万宝智恵袋』収載。

注3：山城のほとんどは整備されていないので立ち入ると危険です、平地から展望して歴史的想像をしてください。

①八重鉾山構居跡（旧飾東郡 姫路市四郷町山脇）

『年報』Vol.21は八重鉾山山頂部を構居跡と想定。八重鉾山西麓は市川が流れ、東麓は山脇の集落、北麓は江戸時代には西国街道となる道が御着から通じる。東麓から山腹に至る印鑰神社参道に「飾磨津龜山道」の道標があり、国府（中世姫路城があった）と飾磨津に向かう分岐点に構居が設けられ、御着城西面の防御拠点としても重要であろう。『播磨鑑』は赤松越前守顕則（赤松円心二男貞範の長子）の子御野刑部少輔則員が御野庄（御野郷力）の領主で山ノ脇村（山脇村）地内に御屋形地がありそれを構居とする。

『飾磨郡誌』は織田信長軍の播磨侵攻を前に、御着城主小寺政職の家臣で山脇居住の山脇六郎左衛門が織田軍の羽柴秀吉に降参する心算ありと、小寺官兵衛らが注進、政職の命で山脇氏は官兵衛らに誅殺され、樋山山麓の女夫塚が山脇夫妻の塚との伝承を載せる。永禄12年（1569）織田軍が初めて播磨に侵攻した際は御着城主小寺氏一族は反信長方であり、小寺休夢（地藏院善慶）の増位城・地藏院城等も落城、織田軍の播磨侵攻をめぐる小寺氏の内部対立を反映した伝承であろう。小寺氏は織田方の調略をうけ天正3年（1575）までに信長に服属する。なお道標から約百メートル南に市之郷薬師の山伏で秀吉に抗した東蔵坊の墓塔がある。



市川右岸の阿保より八重鉾山を臨む



東蔵坊墓塔



飾磨津龜山道道標

②深志野構居跡（旧飾東郡 姫路市御国野町深志野）

深志野は荒神谷から西に開けた集落で御着の北に位置し御着城外堀北ラインが近世には御着村・深志野村境という。谷の東西を有馬道が通じ、西は思出川・天川を渡り国分寺構居（その1）の北を通り市川を経て国府に通じる。東は谷奥から峠を越えると志方に至り有馬を経て京都に至る。深志野共同墓地前で有馬道は北東に分岐、飾東町志吹・北山を経て山崎で丹波道（北条道、社街道）・巡



②-1 御着城本丸跡より北に斎藤山を臨む



②-2 大歳神社

礼道に合流しており戦略上の重要拠点といえる。南に御着城を一望する深志野南側の斎藤山は物見が置かれていたといい「増補播陽里翁説」は御着小寺の家臣斎藤仁左衛門がいたことを山名の由来とし『飾磨郡誌』は斎藤山構居とする。

『城郭』Vol.22は構居跡を有馬道分岐点北側の大歳神社付近、又深志野北側の深志野山（浦山）南麓付近もしくは南尾根筋付近も検討するが未確定。『播磨鑑』は小寺孫四郎又は小寺官兵衛が領主であったとし「増補播陽里翁説」は小寺官兵衛の館があり天正の頃三木の別所氏に攻められ牛堂山国分寺に立て籠もったことを記す。

なお『播磨鑑』に深志野政所（マンドコロ）大村氏がみえ大村鋳物師を統括していたことが想定される。大村は大村千軒ともいい「おゝむらの里は民のみ賑わしくたゝらの煙今ものこして」（『播磨古歌考』）とみえ、たたら製鉄の拠点、佐土と御着の境から北の山麓までを大村の在所とする（『播磨鑑』）が深志野南部も大村に含まれていたことが推定される。御着城（その1）は東に佐土市、西に御着西市、北に大村鋳物師と国分寺門前市を擁し深志野は北面防御と流通の重要地である。



②-3 深志野山南麓より南西尾根筋

③八重畑構居跡（旧飾東郡 姫路市飾東町八重畑）

山崎の東にあり『播磨鑑』は領主を長濱五郎、山崎の構主と兄弟とする。『城館』は春日神社の裏山平坦地を検討するが、「増補播陽里翁説」は村の西平城跡とし、『飾磨郡誌』も村の西平かなるところを城跡とする。八重畑で、北東に北条に向かう丹波道、南西に法華山に向かう巡礼道が分岐し、また八重畑の谷を北上する道は



③-1 春日神社



③-2 天川左岸より北に八重畑の西の平地を臨む

神谷（豊富町）に至ると東に北条に向かい、西に金竹に向かい但馬道に交差する。

なお「播磨古所跡略説」巻之下は八重畑村銀山長谷山が「古来銀堀まふ穴あり」と記し、谷の奥（北）の長谷山と有乳山で江戸初期まで銀を産出していたことを記す。西国が中世以来東アジア銀経済圏に包摂されていることに鑑みても八重畑銀山の重要性に注目すべきであり、谷の東（春日神社）・西（平地）及び神谷からの道筋に居館や監視所が設営されていたことは十分想定しうる。

④山崎構居跡（旧飾東郡 姫路市飾東町山崎）

「城記」は山崎城とし、谷之保にあって長濱備前守が初居城、天正6年（1578）長濱河内守長秋のとき落城とする。『飾磨郡誌』は長濱長秋が別所長治幕下とし、構居は村の中の構居という四段歩の地とするが不詳。

『城館』は集落西北の神社の北の丘を検討する。山崎には八王子神社が北の山麓と西の山麓に二つあり、西の八王子神社前の道は南に丹波道・巡礼道と交差して深志野に至る。北は曾坂（豊富町）に至り但馬道と交差し市川を越えて砥堀の増位山東麓に至るので巡礼道の一つのルートである。



④-1 八王子神社(北の山麓)境内から山崎の集落を臨む



④-2 八王子神社(西の山麓) 左は丹波道に右は曾坂に至る

谷之保の由来は天川の上流域の谷を天川谷といい小原・小原新・八重畑・山崎・北山・塩崎・豊国・庄はかつて谷保内といわれていた。『播磨鑑』には北山村・山崎村・鹽(塩)崎村・八重畑村・小原村・同新村が、「星田庄ナレトモ谷外内(タニホウナイ)と云う」とあり、谷保は星田保(庄)の別名とも考えられる。谷保は中世史料には見えず星田保はわずかに「大館常興日記」天文9年(1540)9月2日条にみえる。保とは庄(荘)・郷・別名とならんで中世の所領をさし郷・保・別名は11世紀頃より出現する国衙支配下の開発所領。「城記」に庄山城は星田保にあって赤松貞範築城とし、御野郷の八重鉢山構居は貞範の子顕則の築城とされ、いずれも中世史料で確認できないので怪しむところだが、市川左岸の星田保や御野郷(史料には三野南条)は地頭職などなんらかの所職を南北朝期に播磨守護赤松氏一族が得ていたことを想定せねばならない。

⑤庄山城跡(旧飾東郡 姫路市飾東町庄・豊国)

庄・豊国の北、佐良和の東に位置する通称城山の山頂部にあり(図)、南西から南に流れる天川を約2km下ると御着城に至る。南麓を通じる丹波道・巡礼道は西に進み市川を渡河して国府に至る。

西は山崎・八重畑から北条を経て京に向かう。西麓には昭和56年開通の播但自動車道開通で消滅したが但馬道が相合池から曾坂へ通じていた。

「城記」は星田保にあって赤松筑前守貞範が築城、越前守顕則、伊豆守貞村、伊豆守元祐、伊豆守、伊豆彦五郎と貞範の子孫が継承し、永禄年中(1558～1570)に別所氏が攻め取り天正5年(1577)城主別所重棟は秀吉に属し破城と記す。

『播磨鑑』は貞範築城、嫡子顕則が宍粟郡より移り、その後享禄2年(1529)小寺加賀守政隆が御着より移り浦上と戦い戦死、天正の頃別所重棟が加東郡より移ると記す。『播州名所巡覧図絵』は赤松貞範・顕範・貞村、山名宗全家臣の原伊四郎、小寺加賀守、山脇左衛門、各拠所と記し、庄山城跡採集遺物も14世紀末から16世紀中葉と

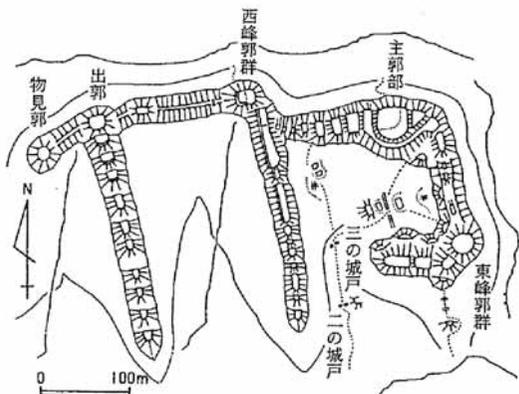


図1 木谷幸夫「姫路の中世山城・庄山城について」『兵庫史の研究』所載の略測図



深志野より塩崎に至り天川左岸より庄山城を臨む



山崎の天川左岸より庄山城を臨む

報告されている。いずれも庄山城をめぐる攻防の激しさが伝わり、また「増補播陽里翁説」は庄山城主の娘およねが城山の井戸で果てても雨天の時はこの井戸の辺りに姿を現すという巷説を載せ、激しい攻防の中で犠牲になった女性を伝えるものであろう。

永正元年(1504)幕府管領細川家の分裂(細川両家記)は播磨守護赤松氏やその被官も対立抗争の渦中となり、享禄3年(1530)には細川高国方の浦上村宗が東上の軍を発し細川政元方の小寺氏と

別所氏を攻め（細川両家記、赤松伝記）、同年7月小寺村職（政隆）は庄山城で討死（書写山十地坊過去帳、二水記）、一方浦上村宗は翌年いわゆる大物崩れで尼崎で討死し数多の死者（小寺・別所攻めで千余人、大物崩れで七千余人と記されている）を出しており凄惨な戦国時代の様相を濃くしている。御着城の大規模整地と土塁構築は16世紀半ばと報告されており、小寺村職（政隆）が庄山城籠城を選択したのは浦上村宗の催した播備作三カ国の大軍を御着城で迎え撃つことができないと考えたからであろう。

永禄12年（1569）に至り織田信長は播磨に侵攻、増井（位）・地藏院両城、大塩、高砂、庄山の5城を落城させ庄山に陣取（益田家什書）とあり、このとき別所長治も織田軍として参戦している。なお『播磨鑑』の豊国城跡は庄山城跡とみられている。

⑥石積山城跡（旧飾東郡 姫路市花田町高木・小川）

石塚太喜三・熱田公「置塩城の年代について」（神戸大学研究集録86）は地元で城田の Teppen と呼ばれる高木・小川の前山を石積山城跡とする。『城館』はそれより北、保城谷といわれる城見台の北の山とみる。『飾磨郡誌』は水上村に石積山構居とする。『年報』vol.22は諸説紹介で慎重、当見学シリーズ32号は高木・小川の前山が石積山城であり『飾磨郡誌』の高木構居と同一とみる。

相国寺鹿苑院蔭涼軒主の記録『蔭涼軒日録』には文明18年（1486）から長享2年（1488）まで赤松政則在城の石積城、石積陣の記載がみえる。嘉吉の乱で没落した播磨守護赤松氏は長禄の変を契機に長禄2年（1458）加賀半国守護として再興、赤松政則は応仁・文明の乱の勃発とともに播磨に侵攻、播備作三カ国守護に復帰するも文明15年（1483）山名氏の播磨侵攻に敗退して被官（家臣）に背かれて播磨国外に没落、翌年將軍足利義政を頼り赤松の惣領職を安堵され京を進発、文明17年（1485）から播磨国内で赤松氏・山名氏の攻防戦が始まり翌文明18年（1486）から赤松氏は書写坂本の山名氏を攻めており、石積城が初めて確認されるのはこの年のことである。坂本城攻めは翌年にも確認され長享2年（1488）に至り山名氏は播磨より撤退する。

「姫路附近の古地図」の古昔往還を増位山南麓・廣峯山南麓を経て西進すると書写南麓の坂本に至り、高木は市川を防衛ラインとした格好の位置にあることがわかる。長享元年（1487）に石積陣とみえることから文明18年～長享2年に『蔭涼軒日録』にみえる石積城・石積陣は赤松政則の坂本城攻めの拠点であったのであろう。

石積城・石積陣において政則は天隠龍沢を招いて父義勝の三十三回忌を行い（長享元年12月9日）城中に来賓用の一室を構えていた。同年石積城の後藤則季は『蔭涼軒日録』の記主亀泉集証の使者に野里鋳物などを贈っているのですでに野里は制圧していたのであろう。長享2年には2月3月に石積陣で手能を催し金剛三郎が能を演じている。



城見台より市川左岸に石積山城跡を臨む



高木橋西詰より石積山城跡



旧版『姫路市史』第3巻付図より